ダイ・ルー族の住まいにおける空間認識と 行動から見いだされる空間概念

シップソーンパンナー（西双版纳）のバーン・ロン（曼龍）の場合

A STUDY ON THE SPATIAL CONCEPT OF DAI LUE PEOPLE AS DEFINED BY THEIR WAY OF SPATIAL RECOGNITION AND BEHAVIOR IN THEIR DWELLING LIFE

In the case of Man Long Village in the Meng La in Xishuangbanna

谷内 麻里子*, 塩谷 寿翁**

Mariko TANIUCHI and Toshio SHIOTANI

In this study, we have continued to search change of dwellings and the way of life of Dai Lue people. In this process we are interested in the spatial concepts. It is the subject of this paper to attempt to explain an order created by sensuous response to space by the Dai Lue people and search the framework which creates dwellings and their way of life.

It is possible to find space concepts where dual things are opposed to each other such as higher rank and lower rank, internal part and external part, and being closed and open from the names of the recognized area, recognized vocabulary and the way of behavior, which represent recognition of the dwelling aspects by the people.

There exists symbolism relating to these space concepts in dwellings of the Dai Lue people. It relates to religious faith to worship the guardian spirits of their families. Some poles symbolize the people's sensuous response to space. Such symbolism of dwellings has started to change in recent years in response to change in the way of behavior and the way of recognizing space by the people.

Keywords : minority people, dwelling culture, behavioral patterns, sense of space, symbolism of dwellings

少数民族, 住文化, 行動のしかた, 空間感覚, 住まいのシンボリズム

1. 本稿の主題・内容

近年にダイ・ルー族¹⁾の住まいおよび住生活の連続性と変化の追究をつづけている。その過程で関心を寄せているのは、住まいをつくりだしている空間的秩序についてである。それは住まいの空間的な組み立てをつくりだす枠組みとっていいものである。この枠組みは、民族の間を比べてみると共通するところもあるが、それよりもまして個別の部分が多く含んでいると考えられる。

人びとの住まいにおける行動（行為、身体動作、行為のおこなわれる場をあわせる概念）²⁾および空間に対する認識は、住まいにひとつの空間的秩序をつくりあげる作用をもつ。とすれば、この両者に含まれる人びとの空間的認識のしかたについての概念（以下、空間概念）を読みとることによって、住まいをつくりだしている枠組みを説明することができる。

これまでに、いくつかの少数民族の住まいでのフィールドワークを試行的にかさねて、住まいの空間的秩序の説明を試みてきた^{3)~5)}。これらのフィールドワークを通じてわかってきたことは、ダイ・ルー族の住まいと住生活は、他のシップソーンパンナーに居住する少数民族（たとえばハニ族、ラフ族など）に徐々に影響を与えているように見受けられることである。このように考え、本稿では、

シップソーンパンナーで先進的と考えられるダイ・ルー族の高床住居をとりあげることにした。

筆者らは、1997年8月から2000年1月にかけて、中国雲南省西双版纳ダイ族自治州ムオン・ラー県ムオン・ラー郷曼那村バーン・ロン（曼龍）のダイ・ルー族の住まいを調査している（以下、バーン・ロン調査）³⁾。これに先立ち、1995年3月から96年5月にかけて、ムオン・ハン鎮バーン・チャ（曼乍）の住まいの少数事例を調査している（以下、バーン・チャ調査）⁴⁾（図1）。

前稿³⁾では、バーン・チャ調査をもとに、ダイ・ルー族の住生活の仕組みを支配する文化的な枠組みを事例的に説明している。

前稿につづいて本稿では、バーン・ロン（曼龍）の住まい（全55戸のうち49戸を調査、以下、調査住居）に現われる傾向をもとに、ダイ・ルー族の住まいの空間的な構成をつくりだしている空間的秩序を説明する。さらにディブラーヘン（同居する家族の守護霊）⁵⁾の存在を中心にすえて、住まいの象徴性とその変化の傾向を述べる。

2. 研究・分析の方法

本稿では、ダイ・ルー族の空間認識と行動に含まれる空間概念をとらえて、住まいをつくりだしている枠組みを説明する。具体的に

* 大阪工業大学大学院工学研究科博士前期課程

** 大阪工業大学工学部建築学科 教授・学博

Graduate School, Osaka Institute of Technology

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Osaka Institute of Technology, Ph. D.

図1 ダイ・ルー族の住まいの調査をおこなったバーン（集落）

は次のようである。

(i) 住まいの内部と外部の居住面（就寝、休息およびくつろぎ、外来者の対応、炊事調理などの日常的な生活における行動がおこなわれる高床の上階の床面）をどのように認識しているのかを、人びとが認識している空間的な広がり（以下、認識領域）をあらわす呼び名から読みとる。そのうえで認識領域をあらわす呼び名に含まれる空間概念をとらえる。

(ii) 上位と下位、内部と外部などの空間の認識をあらわす言葉（以下、認識語彙）の存在を確かめて、語彙に含まれる二元的に対立する空間概念をとらえる。

(iii) 人びとの日常生活および非日常生活における行動のしかたに含まれる空間概念を読みとる。居住面でおこなわれる人びとの行動の場を確かめて、男と女、世代の間、同居する家族⁶⁾と外来者の間の相対的な位置関係に、どのような空間概念が存在するのかを探索⁷⁾。

非日常生活（婚姻の儀礼、葬送の儀礼などの通過儀礼、年中行事）における人びとの行動をとりあげるのは、これまでに継承され保たれてきた住まいをつくりだしている空間的な枠組みが、そこに鮮明に現われ、読み取れると思うからである。

(iv) ディブラーヘンを祀る位置に関する空間的な認識と人び

との行動との関係を探る。

以上に述べた研究・分析の方法は、多くの先行する研究の延長上にある。住まいをつくりだす空間的秩序の考察については、大河直躬の研究⁸⁾に負うところがおおきい。また本稿は、象徴人類学的手法としての、二元論的分類の方法（象徴的二元論）を採用して、住まいの内部における空間的秩序を追究するものである。この方法は、佐藤浩司の民族学・文化人類学における住居研究を総括する論考⁹⁾で紹介されているR.Zugustaの日本と周辺地域の住居の空間構成の象徴的な二分観の観察にもとづく考察¹⁰⁾と方向を同じくするものである。

さらに居住文化は畑聰一の言うように、実在の世界の上に世界観が規定する生活と空間の対応を考慮に入れて概念構造を理解しなければならないもの¹¹⁾であるが、本稿の考察は、住まいをつくりだす枠組みを生活の現象から読みとるに留まっている。

これまでにダイ・ルー族の住まいは概括的に紹介されている¹²⁾¹³⁾。また本稿に先立って、住居語彙からダイ族住居の空間構造を追究する富樫頼らの研究がある¹⁴⁾。これらの報告・研究は、ダイ・ルー族の住まいを対象にする数少ない研究として貴重なものである。しかしながら、筆者らは、ダイ・ルー族の住まいの空間的秩序の追究は端緒についたばかりと考えている。

3. 居住面の構成とその展開

ダイ・ルー族の住まいのおもな居住面の構成については前稿で述べている。ここでは、バーン・ロンの住まいの理解のために必要な部分を要約する。

ダイ・ルー族は、おもに高床のヌーフン（上階）の「おおきな部屋」⁸⁾、ナイション、半外部空間としてのノ（あるいはホン）、ツァン（露台）などで暮らしている。日常的に行動する場は、階下にもひろがっているのだが、おもな居住の場は高床の上階である。住まいの内部は、炉がおかれて日常生活の中心となる「おおきな部屋」と人びとの眠るナイションとに分節している。ナイションは住まいで最も閉ざされた空間である。

バーン・ロンの調査住居には、「おおきな部屋」の規模の異なるものが並存している。それは「おおきな部屋」の間口が狭い住まい

型1-1の住まいの例（住居番号19）

型1-2の住まいの例（住居番号53）

型2の住まいの例（住居番号41）

図2 バーン・ロンの住まいの例

各図の下に住居番号、居住面の構成の型、サオナン・サオツァオ・サオツァオフンの位置関係 (表の脚注に説明) をしめす

図3 パーン・ロンの住まい (調査住居のうち詳細に調査できた住まいの高床の上階をしめす)

(型1、調査住居49戸のうち32戸、65.3%)⁹⁾と広い住まい(型2、同17戸、34.7%)¹⁰⁾とである。型2の住まいは、型1の住まいの「おおきな部屋」を拡大して形成された発展型である(図2、図3)。前稿でとりあげたバーン・チャでの支配的な住まいは型2(調査住居の約77%)であるのに比べ、バーン・ロンでは型1が支配的である¹¹⁾。

バーン・ロンは、1982年から83年にかけて現在の位置に移転している。ムラの北の方向にある南臘河の洪水からムラを守るために移ってきたのだという。聞き取りによれば、以前のムラでは、ほとんどが「おおきな部屋」の間口の狭い型1の住まいだったという¹²⁾。

バーン・ロンでは、おおそ90年代に入って、建て替え、増築など住まいの規模を拡大する建築更新が集中している。

調査住居でおこなわれた建築更新から見いだすことができる居住面の構成の展開の過程は次のようである(図4)。

(i) 型1には、「おおきな部屋」の入り口に近いガンフン(ガンは中心、フンは部屋の意)と呼ばれる部分に炉を置く住まい(型1-1)とフンファイ(ファイは火の意)と呼ばれる炉を置く部分を付加する住まい(型1-2)とが認められる(型1-1の住まいは調査住居49戸のうち14戸、28.6% 型1-2の住まいは同18戸、36.7%)。

(ii) 建築更新の過程の聞き取りによると、現存するダイ・ルー族の住まいの居住面の展開は、型1-1をもとにして始まっている。型1-1の住まいの内部空間は、同じ程度の大きさの「おおきな部屋」と就寝の場となるナイションとからできている。80年代に入

ても型1-1は少数だが新築されている。

(iii) もとのムラから移築後におこなわれた居住面の構成を変える更新は、約半数(30件のうち16件)が型1-1から型1-2への更新である。「おおきな部屋」の間口の広い住まい(型2)が現れるのは80年代になってからである。

(iv) 型1-1から型1-2への展開、型1-1から型2への展開とも、居住面の構成が変わるのは「おおきな部屋」である。ナイションは変わらない。また「おおきな部屋」の拡大にあわせて、ほとんどの更新では、ノ(あるいはホン、半外部空間)やツァン(露台)は造りかえられ拡張されている。

4. 空間認識から見いだされる空間概念

バーン・ロンの住まいには、人びとが認識している空間的な拡がり(認識領域)をあらわす呼び名が存在する。認識領域の呼び名とそれから見いだされる空間概念を述べる(前出、図2、図3)。

(i) ダイ・ルー族は、空間的に未分化な「おおきな部屋」をいくつかの領域に分けて認識している。

型1-1の「おおきな部屋」の認識領域は、ナボン(ナは前、ボンは窓の意)、ガンフン(ガンは中心、フンは家あるいは部屋の意)、ナファイ(ナは前、ファイは火の意)である。型1-2および型2では、これにフンファイ(フンは部屋、ファイは火の意)が加わる。

型1-2の認識領域は、ナボンおよびガンフンは型1-1と変わ

図4 建築更新と居住面の構成の展開

らないのだが、フンファイができることによって、囲炉裏をはさんでナイションとは反対側にある領域ナファイが消滅する。また型2のナボン、ガンフンは、型1-1に比べると、「おおきな部屋」の間口方向にひろがっている。

ナイションの内部には認識領域をあらわす言葉は存在しない。また半外部空間はノ (あるいはホン) とホーホン (ホーは頭の意) とに分けて認識される。

(ii) ナボンは「おおきな部屋」の外壁 (板壁または竹で編んだ壁) にあけられた窓の前の意味をもち、「おおきな部屋」の奥まった場をあらわす言葉である。ガンフンはパトゥ (出入り口) に近い手前の場をあらわす言葉である。ガンフンは家とか部屋の中心を意味する言葉である。型1-1のガンフンには、タオファイ (囲炉裏、タオは灰、ファイは火の意) が置かれている。ここは多くの行動が重なっておこなわれる日常的な暮らしの中心となる場である。ガンフンという言葉と後述する日常生活における人びとの行動からみれば、もともとダイ・ルー族には、囲炉裏のある場を住まいの中心とみる空間概念が存在していた、と考えることができる。

ナボンの領域とガンフンの境界は、ナイションと「おおきな部屋」との間の隔壁に沿うサオランナイ¹³⁾ (一部の住まいではサオランヌー、サオランロン) と呼ばれる柱をランドマークにして分けられている。

(iii) 前稿では、バイヌー (上位の側、バイは側、ヌーは上の意)、バイタイ (下位の側、タイは下の意) という空間の認識をあらわす言葉 (認識語彙) について述べている。これらの言葉はバーン・ロン調査でも存在を確かめることができる。

バイヌー、バイタイという認識語彙の存在からは、「おおきな部屋」を対立する場に分ける空間概念を見いだすことができる。「おおきな部屋」の奥まった認識領域ナボンはバイヌー、入り口に近い認識領域ガンフンはバイタイと呼ばれる。

(iv) 型1-2および型2では、もともと続いて保たれているナボンとガンフンの部分はフンロン (ロンは大きいあるいは主要なものの意)、あらたに付け加わるフンファイの部分はフンノイ (ノイは小さいあるいは新たに付け加わったものあるいは主要なものに対して従に位置づ

けられるものの意) と呼ばれる。これらの認識語彙からは、もともとつづくナボンとガンフンを主要なもの、あとから付け加わったフンファイを従なものとする、内部空間を主と従とに二分する空間概念が読みとれる。

(v) ナイションをバイナイ (内側、ナイは内の意)、「おおきな部屋」をバイノ (外側、ノは外の意) と呼ぶ認識語彙からは、住まいの部分を内部と外部に分ける空間概念の存在が確かめられる。

5. 行動から見いだされる空間概念

住まいで日常的におこなわれる行動を、ウチ向きの生活 (同居する家族のみがおこなう生活) とソト向きの生活 (家族に外来者が加わっておこなう生活) とに分けて考える。それはすでに、前稿で両者の間に行動のしかたの違いを見いだしているからである。

型1-1の「おおきな部屋」のナボンとガンフンは、家族の休息およびくつろぎの場である。また外来者を応対する場である。タオファイ (囲炉裏) はガンフンとナファイとの間に置かれている。この周辺は食事の場である。ナファイでは火をつかう炊事調理がおこなわれる。型1-2、型2になると、火を使う炊事調理の場はガンフンからフンファイに移行する。また食事の場は、一部の住まいではガンフンが使いつづけられるが、ほとんどの住まいではフンファイに移る。

このような日常的な人びとの行動の場 (表) からはいくつかの空間概念が読みとれる。それは次のようである。

(i) もともと「おおきな部屋」のナボンは男の行動の場であり、ガンフンは女の行動の場である。日常の多くの生活場面で男女の場を分ける行動は、これまでにダイ・ルー族に保たれ続けてきた。これは、バーン・チャ調査でえられた傾向から読み取ったものである。また近年まで女性はナボンに入ることはできなかったという¹⁴⁾。

(ii) ソト向きの生活場面では男女の行動の場は違っている。これはバーン・チャ調査でもバーン・ロン調査でもみとめられる行動のしかたである。これまでに保たれてきた男女の場を分ける行動のしかたはソト向きの生活では変っていない。外来者が加わる生活場面では、女は男の領域とされるナボンに入ることはない。

外来者を応対する場は、男の外来者の場合はナボン、女の外来者の場合はガンフンあるいはガンフンの囲炉裏の周辺などである。応対の場は外来者の老若でほとんど違っていない。これは型1-1の住まいでの外来者の応対のしかたである。型1-2、型2の住まいでは、女の外来者の応対をガンフンでするものは少なくなっており、ほとんどの住まいでは、フンファイのタオファイ (囲炉裏) の周辺に應對の場を移している。

いずれの住まいでも、ソト向きの生活場面で男女の行動の場は明確に分けられている。

(iii) 日常的におこなわれる行動の場は、ウチ向きの生活から変わっていつている。ナボンとガンフンとで男女の場を分ける行動のしかたは、近年にウチ向きの生活から変わっている。家族のほかの第三者がいない場面では、女がナボンを使うようになってきている。

ハウレン (夕食) の後のディーサオヘン (休息およびくつろぎ) の場は、もともとはガンフンの囲炉裏タオファイの周辺だったのだが、調査住居のほとんどでナボンに移っている。それはテレビの導入と関係している。テレビは80年代の後半から90年代にかけて導入さ

表 日常生活における行動の場、ディブラーヘンの「依り代」・主要な柱の位置関係 (調査住居のうち詳細に調査できた22戸をしめす)

調査住居の面型	行動の場										ディブラーヘンの「依り代」と主要な柱の位置関係			行動の場 ナイションなどのm・f は家族が就寝する位置 (m=「は夫婦、 m37は37歳の男性、 f20は20歳の女性」) 食：食事 く：テレビ をみてくつろぐ場 く：休息・くつろぎの場 く：くつろぎ(雨季)の場 外來者の応対 △：男の知りあいの場合 ▲：男の親族の場合 ○：女の親族の場合 ●：長老の場合 炊事調理 K1：加熱・もりつけ・配膳 K2：食器・調理具を洗う K3：米を研ぐ K4：野菜を洗う K5：野菜を切り刻む K6：魚・肉を切りさばく ①ディブラーヘンの 「依り代」の位置 ②主要な柱の有無 左からサオナン、 サオツァオ、 サオツァオフン ③②の柱の位置関係 (表の下部に表示) ④「おおきな部屋」での 上下足 常：常に上足 ま：まれに下足 併：上足下足併用 ※ 住居番号3～46は ナファイ、20～55は フンファイ。 ホーボンとホンノイは主 だった行動がおこなわれ ないので略す。
	ナイション		パイタイ	ナボン	「おおきな部屋」		ノ	ツァン	① ② ③					
	パイヌー				ガンフン	ナファイ/フンファイ ※			①	②	③			
3 1-1	m37=f33	m16	f13	食くテ▲●	く	○	K1K5	食く	K2K3K4	ナボン	○○	C	常	
6 1-1	f70	m39=f39	f15	くテ▲●	食	○	K1K5	く	K2K3K4	ナボン	○○	A	常	
9 1-1	f66	f36=m42	m16	くテ▲●	食	○	K1K5	く	K2K3K4	ナボン	○○	B	常	
16 1-1	m22	f62m3	m30=f22m0	食くテ○	食くテ▲●	●	K1K5	く○	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-1	常	
19 1-1	f63	m15 f13	m38=f34	くテ▲●	食く△	○	K1K5	く	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-1	常	
27 1-1	m42=f41	f15	m13	くテ▲●	食	●○	K1K5	く	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-2	常	
46 1-1	m66	f56m9	f33=m32m11	くテ	食く△▲●○	○	K1K5	く	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-1	ま	
20 1-1	m45m3	m24=f22m1		くテ▲●	食	○K1K5K6	K6	く	K2K3K4	ナイション	○○	A	常	
21 1-2	m45=f45	m22 f19		くテ▲●	食	K1K5K6		く	K2K3K4	ナボン	○○	A	常	
26 1-2	m75=f70	m38=f38	f15	くテ▲	食	▲●	食く○K1K5K6	く△	K2K3K4	ナイション	○○	C	併	
28 1-2	m66=f65	m32=f26m8 f5		くテ▲●	食	○K1K5K6	食く○K1K5K6	く△	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-1	常	
30 1-2	f85	m48=f46 m26	m24	くテ▲●	食	○K1K5K6	食く○K1K5K6	く●	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-2	常	
38 1-2	m70=f70	m19 f17	m44=f42	くテ●	食く△▲○K1K5	K6 m22	食く△▲○K1K5	く	K2K3K4	ナイション	○○○	B0	併	
43 1-2	m64=f62	m31=f30 m12	m14	くテ▲●	食く○K1K5K6		食く○K1K5K6	く	K2K3K4	ナイション	○○○	B0	ま	
51 1-2	m39=f39	f16	m22=f19m0	くテ●	食▲	○K1K5K6	食▲	○K1K5K6	K2K3K4	ナボン	○○	A	ま	
53 1-2	m60=f55	f43=m39 f20 f18	f22	くテ▲●	食	○K1K5K6	食	○K1K5K6	K2K3K4	ナイション	○○○	A0-1	ま	
7 2	m57=f58	m36=f36m12	f14	くテ	食	▲▲●○	K1K5K6	く	K2K3K4	ナイション	○○	A	併	
18 2	m48=f40m3	f24=m26m7		くテ▲●	食	K1K5K6	食	く○	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-2	常	
41 2	m53	f48	m29=f22f3	くテ▲●	食▲	○K1K5K6	食▲	○K1K5K6	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-2	常	
42 2	m32=f28m10m8			▲▲●	食	○K1K5K6	食く○K1K5K6	く	K2K3K4	ナイション	○○	A	併	
52 2	m38=f34m12	m14		くテ▲●	食	○K1K5K6	食	く	K2K3K4	ナボン	○○○	A0-2	ま	
55 2	f85	f44=m48	f22 f23	くテ▲●	食	○K1K5K6	食	く	K2K3K4	ナボン	○○	C	併	
A系列：サオナンがタオファイ(囲炉裏)のパイタイ(下位の側)にある(A0-1：サオツァオフンとサオナンとがタオファイをはさんで対置している)														
A0-2：サオツァオフンがナボンとガンフンとの境目におかれる A：サオツァオフンがない)														
B系列：サオナンがタオファイ(囲炉裏)のパイヌー(上位の側)にある(B0：サオツァオフンがある B：サオツァオフンがない)														
C系列：サオナンがナボンとガンフンとの境目におかれる(C0：サオツァオフンがある C：サオツァオフンがない)														

れている。テレビを見る場は男女ともナボンである。

(iv) 前述するパイヌー、パイタイは、男の行動の場ナボンを上位に、女の行動の場ガンフンを下位にみる空間概念である。

ソト向きの生活場面では、同じ場面に居合せる男女の間では、男はパイヌーに坐り、女はパイタイに控えるように行動する。また外來者の応対をナボンとする場面でも、ナボンの奥まった上位の側パイヌーには年配者あるいはムラでの地位の高い者 (司祭、村長など) が坐り、下位の側パイタイには若年者などが坐る。

前述するように、ウチ向きの生活では、男女の行動の場はナボンとガンフンとで分かれていない。「おおきな部屋」で続いてきた人びとの行動から見いだされる上位下位の空間概念は、ウチ向きの生活から消滅しつつある。

(v) パイヌー、パイタイの二元的な認識語彙はナイションにも存在する。ナイションの奥まった位置はパイヌー、反対側の階段に近い位置はパイタイと呼ばれる。人びとは、概括的にみれば、世代の順に上位から下位に並ぶ (蚊帳) で眠る (前出、表)。このように就寝の場には上位下位の空間概念が明確にあらわれている¹⁵⁾。

6. 住まいをつくりだしている枠組み

(1) これまでに継承され保たれてきた空間概念

居住面が展開する過程の比較からみて、調査住居の型1-1の住まいでの暮らし方は、これまでに続いて保たれてきた居住面の構成と人びとの行動を最もよくとどめている、と考えられる (図5)。それは以下のである。

(i) 型1-1の住まいの「おおきな部屋」のナボンとガンフンとでおこなわれる行動は対照的に違ったものである。

人びとはディブラー (守護霊) を敬虔に信仰している。人びとは小乗仏教の信者なのだが、同時にアニミズムの世界に生きている。

バーン・ロンの多くの住まいでは、「おおきな部屋」のナボンの奥まった位置にディブラーヘンを祀る (調査住居49戸のうち32戸、65.3%)。ナボンやナイションの奥まった桁などの上におかれる小さな横長の板には蠟燭や糯米が供えられている (以下、これを「依り代」と呼ぶ)。すべての住まいのディブラーヘンは、かつては「おおきな部屋」のナボンに祀られていたという¹⁶⁾。

ディブラーヘンを祀ってする信仰にともなう行動¹⁷⁾は、「おおきな部屋」のナボンの奥まった位置でおこなわれる。いっぽう日常生活における行動はガンフンを中心におこなわれる。「おおきな部屋」の奥まったナボンにおける行動と手前の入り口に近いガンフンでの行動とは違っている。

「おおきな部屋」には奥の側と手前の側との間に、ディブラーヘンの信仰とそれに対置する日常生活によって意味づけられる空間概念が存在しているのではないかと考えられる。

この二つの場を仮に「聖」なる場、「俗」なる場と呼ぶことにすると、「おおきな部屋」の奥まった場と手前の出入り口に近い場とを結ぶ方向には、「聖」なる場と「俗」なる場という二元的に対立する空間概念が存在していることになる。ちなみにダイ・ルー族は聖俗をあらわす言葉はもたない。

このような「おおきな部屋」の奥まったナボンを「聖」なる場、入り口に近いガンフンを「俗」なる場という言葉であらわされる概念は、すでに空間認識と行動から見いだしたパイヌーとパイタイ、男の行動の場と女の行動の場という概念と対応している。ナボンとガンフンはこのような空間概念を複合して象徴している場である。

図5 継承されてきた空間概念とその変化

ダイ・ルー族の住まいのサオ (柱) には呼び名がついている。それらはサオツァオ、サオナン、サオツァオフン、サオランなどと呼ばれる。これらの柱はダイ・ルー族の空間的な認識に現われる概念を象徴的にあらわしている、と考えることができる (図6)。

型1-1の住まいの「おおきな部屋」のガンファンのタオファイ (囲炉裏) をはさんで、奥まった位置にはサオツァオフンが、入り口に近い位置にはサオナンが向かいあっている。サオナン (娘柱) と対になっているサオツァオフン (フンは家の意) は家の主人の柱という意味の柱である。

サオナンは古くはサオピサオクウ (ピは唐辛子、クウは塩の意、塩と唐辛子の入った容器をかける柱の意) と呼ばれていた。サオナンはすぐれて生活的な概念を象徴している柱である。またサオツァオフンは、呼び名のとおりの一家の主人を象徴する柱である。

この二つの柱は、男と女の行動を象徴している。それは、タオファイ (囲炉裏) 周辺のサオナンの近くで炊事調理をする女の行動、食事などの生活場面で、サオツァオフンに近い上位の側に男が坐り、下位の側に女が坐る行動から説明できる。ダイ・ルー族は、一家の主人と女とが支えている日常の暮らしを、タオファイをはさんで対置する二つの柱が象徴するものと認識している、と考えることができる。

ナボンとガンファンとの間の上位下位の関係、サオツァオフンをパイヌーに置きサオナンをパイタイに置く二つの柱の位置からは、男を上位・奥に、女を手前・下位に置く空間概念が読みとれる。

(ii) ナイションは、住まいのなかで外来者の侵入を拒む隔離された唯一の空間である。いっぽう「おおきな部屋」は家人の許しを得て入ることができる外来者に開かれた空間である。これより、二つの部屋の間に、外部に閉じた場、開いた場という対立する空間概念を見いだすことができる。

ナイションと「おおきな部屋」との間には、内部と外部、閉じた

と開いたという空間概念が複合して存在する。

サオナン (娘柱、ナンは処女あるいは娘の意) は「おおきな部屋」に、サオツァオ (男柱、ツァオは男の意) はナイションにある柱である。このサオナンに開いたという概念を、サオツァオに閉じたという概念を対応させてみると、サオナンは、日常的な生活の中心となる開かれた場を象徴しており、サオツァオは、もっとも奥まった隔離された場を象徴している、との見方が成り立つ。人びとは、二つの柱サオナンとサオツァオとを、二元的に分けられる対立する二つの場を象徴するものとして認識している、と考えることができる。

(iii) 非日常的生活とくに婚姻の儀礼、葬送の儀礼における人びとの行動には、これまでに継承され保たれてきた空間概念が、日常的生活に比較してより鮮明に現われる。

婚姻の儀礼で宴会の場となる「おおきな部屋」では、男女の行動の場はパイヌーのナボンとパイタイのガンファンで明確に分かれる。またナイションは婚姻の儀礼では儀式的場となり、「おおきな部屋」は宴会の場に転換する¹⁸⁾。

葬送の儀礼での行動¹⁹⁾からは、人びとは死者がナイションと「おおきな部屋」との境界の壁をへて現世から死後の世界に入るように認識しており、ナイションと「おおきな部屋」との間には、死後の世界と現世という概念が対応する空間認識が存在していることがわかる。

非日常的生活における行動からは、「おおきな部屋」とナイションとを位相の異なる空間とする空間認識の存在が読みとれる。

(非日常的生活は住まいと住生活の分析には不可欠のものである。これは十分に承知している。非日常的生活における人びとの行動から空間概念を読みとる記述については、儀礼・行事の過程における行動の資料を充分に示す必要があると考える。これは紙幅の都合もあり稿を改めて報告したい。ここでは空間概念に関わる行動を要約した。)

図6 サオナン（娘柱）、サオツアオフ（一家の主人の柱）、サオツアオ（男柱）の配列とその変化

(2) 住まいをつくりだしている枠組みの変化

以上のような、これまでに続いて保たれてきた住まいをつくりだしている枠組みは、徐々に変わりつつある（前出、図5）。それは以下のようである。

(i) 近年に、ダイ・ルー族の生活習慣は変わってきている。なかでも顕著なのは、高床の上階で保たれてきた上足の習慣が徐々に壊れていっていることである。これまでは「おおきな部屋」に下足で入ることはなく、下足はカライ（階段）の上り口のトッポ（踏み石）で脱ぐものであった。また前述するようにナボンは人びとがテレビを視てくつろぐ場になっている。

このようなナボンは、ディブラーヘンを祀る場にはふさわしくない、と人びとは考えるようになってきている。それはディブラーヘンの「依り代」をナボンからナイションの奥まった場に移す傾向（17戸、調査住居の34.7%）から説明できる。

ディブラーヘンの「依り代」を祀る位置と人びとの空間認識および行動とは関係していると考えられる。

ディブラーヘンの「依り代」が「おおきな部屋」からナイションに移されるようになると、ナイションはディブラーヘンの信仰にともなう行動の場となり、「おおきな部屋」は日常生活における行動の場となる。先に述べている「聖」なる場、「俗」なる場という言葉を用いるなら、「聖」なる場は「おおきな部屋」のナボンからナイションに移り、ガンフンでおこなわれていた日常生活の行動の場、つまり「俗」なる場は「おおきな部屋」の全体にひろがる。

ナイションと「おおきな部屋」との間には、内部と外部、閉じたと開いたという空間概念のうえに、「聖」なる場と「俗」なる場という概念が重なって認識されるようになる。

(ii) 一家の主人を象徴する柱サオツアオフを持たない住まいは増えている。サオツアオフはかつてはバーン・ロンのすべての

住まいにあったという²⁰⁾。しかし調査住居の約半数にサオツアオフは無い。サオツアオフとサオナンとに男女を対応させる象徴性は、サオツアオフの無い住まいには受けつがれていない（前出、図6）。しかしバイヌーのナボンを男の場、バイタイのガンフンを女の場とする行動は、前述するようにソト向きの生活では、つづいて保たれている。

7. 本稿で得られた結果

本稿では、ダイ・ルー族の空間認識と行動に含まれる空間概念をとらえて、住まいをつくりだしている枠組みを説明し、住まいの象徴性を、家族の守護霊を祀る行動に視点をおいて追究しようとした。事例的に調査したバーン・ロンの住まいのしめす傾向をもとにして得られた結果は、次のようである。

(i) ダイ・ルー族の住まいの内部空間は、「おおきな部屋」とナイションとに分節するものである。この一見すると単純にみえる居住面の構成は、二元的に対立する空間認識を生み出す象徴性にささえられてつくりだされている。

(ii) これまでに継承され続いて保たれている、人びとの空間認識と行動からは、「おおきな部屋」の奥まった側と入り口に近い側に、ディブラーヘンの信仰にともなう行動とそれに対置する日常生活によって意味づけられる、「聖」なる場と「俗」なる場という空間概念、上位と下位、男の行動の場と女の行動の場という概念が対応していることがわかる。ナボンとガンフンはこのような空間概念を複合して象徴する場である。

またタオファイ（囲炉裏）のバイヌー（上位の側）にサオツアオフ（家の主人の柱）を置き、サオナン（娘柱）をバイタイ（下位の側）に置く配列からは、男を上位・奥に、女を下位・手前に置く空間概念が読みとれる。

いっぽうナイションと「おおきな部屋」との間には、内部と外部、閉じたと開いたという空間概念が複合して存在している。ナイションのサオツァオ（男柱）と「おおきな部屋」のサオナン（娘柱）は、この二元的に対立する空間概念を象徴するものと考えられる。

(iii) 住まいをつくりだしている枠組みは、近年の人びとの行動および空間認識の変化に対応して徐々に変容しつつある。

「おおきな部屋」のサオナンとナイションのサオツァオに象徴される空間概念は、ディブラーヘンの「依り代」がナボンからナイションに移る傾向に関係して変わる。ディブラーヘンの信仰にとともなう行動の場はナボンからナイションに移り、「おおきな部屋」は日常生活の行動の場になる。また、サオツァオフンとサオナンとに男女を対応させる空間認識は弱まっている。それは、サオツァオフンが無くなり、「おおきな部屋」を拡大して設けられるフンファイに炉を移す変化と関係している、と考えることができる。

これまでに続いてきた「おおきな部屋」を二元的に分ける空間概念は、人びとの空間認識には保たれているが、ウチ向きの生活での行動から変わりつつある。

注

1) ダイ族は、漢・チベット語系チワン・タイ語支に属し、ひろく中国西南部（雲南省・貴州省）、タイ、ラオス、ビルマ（ミャンマー）、ベトナム、インドにまたがって居住する少数民族。水稻耕作をおこない小乗仏教を信仰する。ダイ・ルー族は中国に居住するダイ族の支族のひとつ。

2) 本稿では、行動をあらわす要素のうち、身体動作および行為の場をしつらえる住生活財にはふれていない。行為と行為の場との関係に現われる空間概念を読みとることに焦点をあわせたためである。

3) 住まいの平面的な構成、住生活財・生活装置、日常生活および非日常生活における行動、住まいの各部の呼び名、空間の認識をあらわす語彙、などを実測、観察、聞き取りにより調査。調査は、1997年8月から9月、1997年12月から1998年1月、1998年12月から1999年1月、1999年12月から2000年1月におこなった。ダイ語の発音と意味は、ダイ語—漢語、漢語—日本語の通訳を介して聞き取っている。なお複数のインフォーマントに聞き取りを繰り返すことによって、できる限り正確を期すようにつとめた。

4) 中国雲南省西双版纳ダイ族自治州景洪県ムオン・ハン鎮バーン・チャ（曼乍）でおこなった調査。バーン（集落）の全住居46戸のうち13戸を調査。

5) 覃 光弘等によれば²¹⁵⁾、ダイ・ルー族は精霊の存在を信じており、精霊に対する信仰は人びとの暮らしと強く関わっている。ダイ・ルー族にはディブラー（守護霊）に関する多くの儀礼が存在する。守護霊は、ディブラーヘン（家族の守護霊）のほかに、ディブラーバーン（集落の守護霊）など、それが守護する信じているさまざまな社会的単位に対応している。ディブラーは、地域によってはデューラー、ティウラなどともよばれる。

6) 同居して生業・生計をともにする生活集団。ダイ・ルー族は一夫一婦制である。多くの家族では三世代あるいは二世代が同居する。婚姻によって親と続いて同居する場合と一定期間が過ぎて分家する場合とがある。

住まいにおける基本的な行動は、家族の構成によって違ってはいない。またバーン・ロンでは、世襲の司祭、選挙で選ばれる村長などは存在するが、ムラ社会での階層差は存在しない。しかし労働力の違いから生ずる経済的な差異は家族の間にある。この差異は住まいを拡大する展開に関係しているようである。

7) 日常生活における行動は、ホストファミリー、ポーワンキョウさんの住まいに滞在して家族の行動を終日にわたって観察記録した。そのうえで確かめることができた主要な行動を、調査住居の全家族を対象に聞き取った。また非日常生活における行動は、世代ごとのインフォーマントを選び聞き取っている。なおその一部は、バーンでの滞在中におこなわれた儀礼と行事（婚姻の儀礼、カァウカン）を観察して確かめることができた。

8) ダイ・ルー族の住まいの内部空間は炉の置かれる部屋とナイションとに分節している。炉のおかれる部屋には呼び名がない。「おおきな部屋」は筆者らが説明を容易にするためにつけたものである。

9) 間口方向（梁間方向）におなじ梁間の「おおきな部屋」とナイションとが並ぶ住まい。

10) 型1の「おおきな部屋」をナイションと反対側にナイションの奥行きにあわせて奥行方向（桁行方向）いっばいに広げた住まい。

11) 居住面の構成とその展開の様子は地域によってかなり異なる。「おおきな部屋」の間口の狭い住まいは、州都・景洪に近いムオン・ハンのバーン・チャのようなバーンでは、ごく一部にしかみられない。しかし、ラオスに近いムオン・ラーのバーン・ロンのようなバーンではむしろ主流になって

いる。

12) バーン・ロンで最も建築に詳しいと言われる住民であるポーコンシェンによる。

13) ナイションと「おおきな部屋」とを分ける壁に沿って、通常は3本ないし4本のサオラン（ランは頂、支えるの意、一家の中心になる男性の老人のように、柱のなかで頂点にたつ中心になるという意味をもつ柱）と呼ばれる柱が並ぶ。サオランは住まいで最も重要な柱と考えられている。そのうち最も奥まって位置するサオランは、サオランナイ（ナイは内の意）あるいはサオランヌー（ヌーは上の意）と呼ばれる。内側、上位の側にあるサオランという意味である。

14) バーン・ロンのボーディブラバーン（ディブラーの司祭）；ポーウンノイによる。

15) ナイションは眠る場である。人びとが眠る場はいくつかのス（蚊帳）である。蚊帳は夫婦およびおおそ12-13歳以上の子どもを単位にして吊るされる。世代の異なる夫婦の蚊帳の間に成人の子どもの蚊帳が吊るされることはあるのだが、概括的にみれば、同居する家族の蚊帳は、パイヌーからパイタイにかけて世代の順に並ぶ。

16) 14)に同じ。

17) 家の主婦は毎日、糯米を炊いてディブラーヘンに供える。遠いところへ旅立つとき、病気になったときなどには、人びとはディブラーに守護を願う。

18) このような婚姻の儀礼でナイションが儀式的場になる結婚式のおこなわれたのは、近年になって現われるようになったのではないかと筆者らは考えている。バーン・チャとバーン・ロンでの聞き取りをあわせてみると、継承されてきたのは「おおきな部屋」のナボンを儀式的場とするものと考えられる。

19) バーン・ロンのボーチャン（ワ（寺）の世話役）；ポーウンチョイによると、死後には、「おおきな部屋」のガンフンで死者を坐らせ湯灌アンナンをする。その後、遺体はナイションに運ばれて、サオランナイに足を向けるようにして棺に入れ安置される。人びとは、サオランナイから死者が昇天するものと信じている。サオランナイは天（あるいは来世）に通じる聖なる柱と信じられている。この習俗は現在も続いている。

20) 12)に同じ。

引用文献

文1) 塩谷壽翁・沖田富美子：住生活の仕組みを支配する文化的枠組み 中国雲南省大理白族自治州喜州鎮仁里邑の事例から ベー族の住生活の伝統と変容、日本建築学会計画系論文集 第525号, 167-174, 1999.6

文2) 塩谷壽翁：ダイ・ルー族の住居における空間のシンボリズム—雲南省シブソンバンナのちいさなムラから—、日中建築（日中技術交流会：発行）第48号, 3-8, 2000.3

文3) 塩谷壽翁：哈哈尼（ハニ）族の住居はどのようにかわりつつあるのか—雲南のちいさなムラから—、民俗建築（日本民俗建築学会：発行）第110号, 76-89, 1996.11

文4) 塩谷壽翁：儀礼空間としての住居—大理白族自治州喜州鎮仁里邑でのベー族の葬送の儀礼・取材報告—、民俗建築（日本民俗建築学会：発行）第113号, 38-53, 1998.5

文5) 塩谷壽翁：ダイ・ルー族のカァウカン—シブソンバンナの小さなムラでの取材から—、民俗建築（日本民俗建築学会：発行）第115号, 68-80, 1999.5

文6) 三澤真樹子・谷内麻里子・塩谷壽翁：日常の暮らしにおける行動のしかたと空間概念 ラフ・ナー族の住まいをつくる文化的枠組み 中国雲南省孟連公信郷パンカのフィールドワークから その2、日本建築学会近畿支部研究報告集 第42号・計画系, 449-452, 2002.6

文7) 塩谷壽翁・沖田富美子：住生活のしくみを支配する文化的な枠組み 西双版纳のバーン・チャ（曼乍）の事例から ダイ・ルー族の住生活の伝統と変容、日本建築学会計画系論文集 第508号, 105-112, 1998.6

文8) 大河直躬：住まいの人類学（イメージ・リーディング叢書、平凡社：発行）、1986

文9) 佐藤浩司：民族学・文化人類学における住居研究 方法論的回顾、住居・集落研究の方法と課題—異文化の理解をめぐる—（日本建築学会建築計画委員会：編集）、114-124, 1988.10

文10) Richard Zgusta: Dwelling Space in Eastern Asia（東南アジアにおける住居空間）、大阪外国語大学学術研究双書4, 1991.3 など

文11) 畑聰一：離島集落における住居及び住居集合の共同性に関する研究、1996

文12) 雲南省設計院：ダイ族民居、雲南民居, 209-324, 1986.6

文13) Zhu Liangwen: THE Dai or the Tai and their Architecture & Customs in South China, D D Books & The Science Technology Press of Yunnan, 1992

文14) 富樫頼ほか：住居語彙からみたダイ族住居の伝統的空間構造、日本建築学会計画系論文集 第483号, 169-178, 1996.5

文15) 覃 光弘等編著 伊藤清司・監訳、林雅子・訳：中国少数民族の信仰と習慣（下巻）（第一書房：発行）、402-405, 1993

（2002年10月3日原稿受理、2003年3月24日採用決定）